

アンチヒーローたちの物語 少年兵、捕虜／囚人、脱走兵、そして……

沼野恭子

忘却というのも、ある種の嘘です。
アレクシエーヴィチ『亜鉛の少年たち』

はじめに

2022年10月現在、ロシア軍はいまだにウクライナ領土から撤退していない。それどころか、プーチン政権は核兵器使用の可能性に再三言及しつつ、黙示録的な終末に向かって半歩踏み出すような暴挙に出た。10月8日クリミア大橋で爆発が起きるや、間髪を入れずウクライナ諸都市に対して一斉にミサイル攻撃を始めたのである。ウクライナ東部のロシア系住民を守るといった、そもそもの侵攻の大義名分をかなぐり捨てたかのよう

に。世界は危機的な緊張感の真ただ中にある。

ロシアが仕掛けたこの戦争は、主権国家である他国への侵略戦争であるという点で1979年に始まったアフガニスタン戦争を想起させる。そのため私は当初、スヴェトラナ・アレクシエーヴィチ（1948-）の証言集『亜鉛の少年たち』に描かれているような悲劇——プロパガンダを信じて戦地に送られた青年たちが、たちまち亜鉛の棺に入れられて帰国するか、あるいは帰還した兵士たちが「政治的過失」による厄介者として白い目で見られるなどの悲惨な状況——がふたたび繰り返されるのではないかと危惧していたのだが、9月21日に「部分動員」が発動されてから、かなり様相が異なってきたように見受けられる。すでに動員令以前からロシアを出ていく人の数は数十万にのぼると言われていたが、発令後は前線に行くのを拒否してジョージアやカザフスタン、キルギスタンに逃れようとする人たちの長い車列が続いていると連日ニュースで報じられている。街に出て戦争や動員に反対する意思表示をするとたちまち手荒く拘束されてしまうので表立った活動はできないが、召集を逃れるための診断書を入手する人、召集令状を受け取らないよう身を隠す人、戦場でウクライナ側に投降する兵士が出てきているという。こうした「消極的反抗」は、ロシア社会に少しずつ厭戦気分が広がり始めていることの証左ではないだろうか。

戦争に巻き込まれて実際に辛酸をなめるのは、つねに権力や富を持たない弱者だ。ロシア文学の系譜でいうなら「小さき人」である。現在と同じく言論の自由が制限され抑

沼野恭子：東京外国語大学大学院総合国際学研究院・教授



庄の厳しかったソ連時代に、文学は戦争弱者をどのように描いていたのだろうか。プロパガンダが喧伝する「英雄」になることを拒んだ者、人を殺すことを忌避しようとした「アンチヒーロー」たちを過去の物語に探してみたい。20世紀ロシア文学史のページにしかと刻まれている彼らの面影を忘却のかなたに追いやらないために。

1. オクジャワ——少年兵の物語

雪どけ期の1961年、モスクワの南西約180キロに位置する地方都市カールガの出版社から、事前検閲を受けていない『タルーサのページ』というアンソロジーが刊行された（当時タルーサに住んでいた作家コンスタンチン・パウストフスキーの編集）。この文集にブラート・オクジャワ（1924-97）が処女小説『少年兵よ、達者で』を寄稿した。1942年に志願兵として独ソ戦に従軍したオクジャワ自身の実体験にもとづく自伝的中編である。18歳の「ぼく」が戦場で重要な書類を連隊長に届けるよう命じられたのに、連隊長が見つからず銃殺されるのではないかと怯えて泣く場面から始まる。当時「戦争文学」といえば、祖国を守るため果敢に闘う英雄を描いた愛国的な作品ばかりだったことを思えば、軟弱な主人公、長靴などの支給品の不足、理不尽な行軍といった描写は、公式の規範からさうとう逸脱した戦争表象だったといえよう。

とりわけ、若い主人公が死ぬことを恐れ、生きること执着する姿は、人間の生理からしたらごく自然なことだが、「死をも恐れずファシストと闘う」理想のヒーロー像からはかけ離れている。

ぼくを助けて。救いだして、ぼくを。ぼくは死ぬのはいやだ。ちっぽけな鉛のかけらが心臓か頭にささって、それで終わりだなんて？ それでぼくの熱い血の流れるからだが、熱くなくなってしまうというのか？ [中略] ぼくを、助けて。考えたって滑稽ではないか、まだ何ひとつやりとげることのできなかつた人間を殺すなんて。ぼくは、十年級さえ終えてないんだ。¹

集団的な自己犠牲（＝死）を求めてくる規範に対して、語り手は心の中で「ぼくを助けて」と個人的な救い（＝生）を願っている。個人の生をかけたがえのない大切なものとしてイデオロギーより重視したり、求められる「男らしさ」を拒否して泣くことを恥ずかしいことだと考えないというのは、ソヴィエト的規範を切り崩すことにつながっている。これは、『少年兵よ、達者で』の後、吟遊詩人として一世を風靡することになるオク

¹ オクジャワ（安井侑子訳）『少年兵よ、達者で』『現代ソヴィエト文学18人集（3）』新潮社、1967年、250頁。

ジャワの詩作品や、さらにその後の一連の小説においても見られる彼の一貫した志向である。

この作品でシンボリックなのは、食べ物のメトニミーであるスプーンを語り手の「ぼく」が失くしてしまうことだ。いわゆるマイ・スプーンは、兵士にとってまさに生き残るために必要不可欠な命綱のようなものだから、スプーンの紛失は「ぼく」がぎりぎりまで死に近づいたことを示唆している。ドイツ兵のスプーンを仲間がくれると言ったときには、ドイツ兵がそのスプーンを舐めまわしたところを想像して生理的に拒否するが、やがて負傷して送り返されることになる（オクジャワ自身、戦場で負傷して復員している）。そのとき、いっしょに闘っていて亡くなった古参兵シヨンギーンのアルミ製のスプーンが思いがけずポケットから出てきた。最後にスプーンを手にする事で「ぼく」が生に舞い戻ったことを暗示しているのだろう。スプーンへの執着は、生への強い希求である。国家のために犠牲になることが奨励され死が強要された戦時下のソ連社会にあって、「ぼく」のこうした態度は消極的な反抗のしぐさであった。

いつぼくは、これを拾うひまがあったんだろう？ シヨンギーン、シヨンギーン
……。これがあんたのかたみだ。何ひとつ残らなかつた、ただ匙だけしか。ただ匙
ひとつだけ。²

この中編より少し前に書かれたオクジャワの詩「また会おう、少年たち」（1958）にも同じような内容が盛り込まれている。

ああ、戦争よ、なんてことをしてくれたんだ、卑劣なやつめ。
ぼくたちの中庭はどこも静まりかえり、
少年たちは頭をもたげた――
少年たちは急に大人びて、
玄関に姿を見せるや
兵士となって次々に去っていった……。
また会おう、少年たち！
少年たち、
かならず帰ってくるんだよ。³

² 同上、312 頁。

³ Булат Шалвович Окуджава. Стихи и песни. Упраздненный театр. М.: АСТ; Зебра Е, 2007. С. 57.
日本語は拙訳。

詩人は、少年たちに「かならず（生きて）帰ってくるんだよ」と呼びかけ、この詩句を全部で3回繰り返している。さらに、「戦争」を擬人化して「卑劣な」という形容詞を添えることにより、戦意高揚を拒否する姿勢をはっきり打ち出している。ソ連で「戦争」を形容する語と言えば、たいてい「偉大な」か「神聖な」と決まっていた。オクジャワの詩は、日露戦争が始まってすぐに書かれた与謝野晶子の詩「君死にたまふことなかれ」（1904）に通じる反戦の信念といえるだろう。

2. ソルジェニーツィン——捕虜／囚人の物語

死を怖れる臆病な少年兵の物語が掲載された『タルーサのページ』は、刊行直後、当局によって「間違い」だったと決めつけられ、書店や図書館から回収された。その翌年の1962年、文芸誌『新世界』にアレクサンドル・ソルジェニーツィン（1918–2008）の中編『イワン・デニーソヴィチの一日』が発表される。それまでソ連の公式文学に主要な舞台としてラゲリが出てきたことはなかったため、この小説は世界的なセンセーションを巻き起こし、雪どけを象徴する作品となった。発表にあたってはこの雑誌の編集長だったアレクサンドル・トワルドフスキーの尽力があったことが知られているが、文芸評論家ドミートリイ・ブニコフは、フルシチョフ共産党書記長がそれを許可したのは、スターリニズムと闘うために連携できる人をフルシチョフ自身が必要としていたからだとして述べている。⁴ いずれにせよ偶然と幸運が重なり、この小説をもってロシア語文学の世界に「収容所文学」というジャンルが公に幕を開けたのだった。

この作品は、ごく平凡な農民だったイワン・デニーソヴィチ・シューホフが独ソ戦に参加した後どのような収容所生活を送っているか、その一日を詳細につづったものである。着ている服に«Ш-845»と囚人番号が書かれているというのは、エヴゲーニイ・ザミャーチンのアンチユートピア小説『われら』（1920–21 執筆）の主人公のユニファ（お仕着せの制服）に«Д-503»と書かれていたこととそっくりだ。ザミャーチンの描いた画一的な恐ろしい未来の管理社会が、現実のソ連の収容所あるいはソ連という名の収容所列島と驚くべき相似関係にあったことを示している。

シューホフはいたって真面目で几帳面な人で、過酷な環境で重労働をさせられているにもかかわらず、こつこつこなして「労働の喜び」まで感じている。班の仲間と話がはずむときもあり、そうした会話を通じて読者はシューホフがなぜ収容所に入れられたのか、そのあまりに理不尽な理由を知ることになる。

書類によると、シューホフの罪は祖国への裏切りということになっている。いや、

⁴ Дмитрий Быков. *Время изоляции 1951-2000 гг.* М.: Эксмо, 2018. С. 111-112.

彼はそう自白したまでだ。つまり、自分は祖国を裏切るために、捕虜となり、ドイツ諜報部の任務を遂行して、帰国を許された者である、と。もっとも、それがどんな「任務」であったかは、シューホフ自身はもちろん、取調官も思いつかなかった。⁵

真相はこの書類とは異なっていた。シューホフの所属していた部隊が敵に包囲され、彼は捕虜として捕えられたが、数日で脱走することができ、しかも奇跡的に友軍に出会った。ところが、味方にそう正直に言っても信じてもらえず、やむなく書類に署名せざるを得なかったのである。当時ソ連では、ドイツ軍の捕虜になるということは「ドイツのスパイ、裏切り者」になることとほぼ同義だった。実際、解放されて国に戻った元捕虜たちの多くが、今度はソ連国内の収容所に送られ、強制労働に従事させられたといわれている。日本でも、東條英機による『戦陣訓』（1941）の中の一節「生きて虜囚の辱めを受けず」が有名だが、捕虜になることは恥、あるいは悪事であるとする点で、ソ連と日本は体制こそ違え、奇しくも同じメンタリティだったといえる。

さて、このように「小さき人」シューホフは、国家の論理に振りまわされ、虫けらのように扱われているわけだが、一方で庶民的な知恵を精一杯はたらかせ、要領よくスープを2杯せしめたり、別の囚人からタバコを買ったりして、一日が終わるときには「暗い影のちっともない、幸いといってもいい一日だった」と満足さえ覚えている。彼には、自分をこのような境遇に導いた権力者に対する恨みも、戦争に反対する意思もない。すべてを運命であるかのように従順に受け入れ、与えられた環境のなかでしぶとく生き延びようとする。

それに対して作者ソルジェニーツィンは、召集され従軍したが、1945年に前線から知人に宛てて送った手紙の中でスターリンを揶揄したとして逮捕され、収容所送りになった知識人である。1967年には、検閲廃止を訴える書簡を作家大会に送っている。「文学が同時代の社会の呼吸する空気とならず、その苦悩と不安を伝えることができないなら、それは文学の名に値せぬ紙屑に過ぎない」として、検閲制度を憲法違反であると正面切って批判したのである。ソルジェニーツィンは、素朴な農民の話し言葉を駆使してシューホフを造形し、ある意味で典型的なロシアの農民の姿を描きだしたと言えるが、そのシューホフは「捕虜／囚人」として過酷な運命を担わされていたのである。

政権側からすると、シューホフのような（元）捕虜の存在は、大祖国戦争の最中もその後も、隠しておきたい「都合の悪い真実」であった。約100万人もいたという女性兵士の存在とともに、この捕虜／囚人の問題は、戦後長いあいだ表に出すことのできないタブーでありつづけた。雪どけの中途半端な自由化では、すべてのタブーを解くことは

⁵ ソルジェニーツィン（木村浩訳）『イワン・デニーソヴィチの一日』新潮社、1963年、96頁。

できず、これらの問題が顕在化するにはペレストロイカとグラスノスチによって言論の自由化が進むのを待たなければならなかった。

映画の世界もしかりで、例えば、アレクセイ・ゲルマン監督の『道中の点検』（1971）は、ドイツ軍の捕虜となりドイツに協力していたソ連の伍長がソ連軍に戻ってくるという設定で、「裏切り者は処刑すべし」という命令があったにもかかわらず隊長はその命令に従わずこの伍長にチャンスを与えるというドラマである。1970年代にはこのようなテーマを扱うこと自体がタブーだったため、15年もの間お蔵入りしていたこの作品は、ようやくペレストロイカ期の1986年に公開されたのだった。

3. ラスプーチン——脱走兵の物語

このように、敵軍の捕虜になることは不名誉だっただけでなく、「スパイ行為」をしていたとして帰国後きわめて非人道的な処遇を受け、たとえ脱走してきたとしても犯罪者扱いされるということであった。これが自国の軍隊から脱走したとなったら、さらに重罪になったことはいまでもない。ワレンチン・ラスプーチン（1937-2015）が1974年に『わが同時代人』誌に発表した中編『生きよ、そして記憶せよ』は、大祖国戦争で3年も必死で闘ったあげく負傷し、それでも帰郷を許されなかったために脱走した男アンドレイの物語である。退院したらせめて一日でもいいから家に戻れるだろうと期待していた彼は、それが叶わないことがわかると前線に戻らず、反射的に反対方向に向かった。終戦までわずかだったのだがそんなことは知るすべもなかったし、どうしようもなく郷愁が募ってしまったのである。やがて故郷の自分の家のそばに身を隠したアンドレイに気づいた妻ナスチョーナが、食べ物を届けたり風呂を沸かしたりして夫をかくまう。

1970年代のソ連文学で脱走兵を主人公にするというのは、いわゆる戦争文学として異例のことだったはずだが、「農村派作家」と呼ばれる正統的リアリズムの作家ラスプーチンのこの作品は、何度も版を重ね、彼の代表作となった。雄大で厳しいシベリアの自然を背景に、銃殺を覚悟しつつ身を隠し、ときおり自暴自棄になるアンドレイと、夫の言いつけを守り脱走についてだれにも一言も明かさず、夫のために尽くしてしだいに追いつめられていくナスチョーナの絶望的な愛を描いた優れた小説である。とりわけ秀でているのは、人目を気にしながら雪原を行き、氷の融けたアンガラ川を渡って夫に会いに行くナスチョーナの細やかな心理や自然の描写である。

夫は自首するつもりもなく、妻は夫の気持ちを量りかねて「戦争が終われば許してもらえるのではないか」と問うが、答えはこうだ。

「いや、こんなことは許しちゃもらえねえ。こういうことをしでかした奴は、なろうことなら三遍ずつも銃殺刑にかけられるところさ——死んだ奴をもう一度引っ

立たせてまた撃つんだ。他の連中への見せしめにな。おれの運命ははっきりしてる、いまさらジタバタすることはねえ [後略]⁶

脱走するということがどれほど重い罪か（三度銃殺されてしかるべき）アンドレイはよく心得ているのだ。やがてナスチョーナは身ごもったことを知る。自分の血が子どもに受け継がれることを喜ぶ夫と、あらゆる苦しみを引き受け、八方塞がりの状態から破滅への道を突き進む妻。全編に死の匂いを漂わせながら、作品はしだいに神話的な色合いを濃くしていく。戦場にいたアンドレイと、村で彼を待っていたナスチョーナが同じ夢を見ていたことがわかったり、アンドレイに自分の仔牛を殺された母牛が、身動きもせずじっと彼を睨んで、あたかも不吉なことを予言するような異様な目をしていたり。

アンドレイはけっして反戦思想や信条から脱走したわけではなく、自らの行動が引き起こした事態を当初は「運命」だと思っていたのだが、やがてその過酷な運命に導かれた根本的な原因が戦争それ自体にあるのではないかと思ひ当たる。

「これはみんな戦争のせいだ、そうなんだ」彼はふたたび弁解を呪文のように唱えはじめた。「戦争は、あれだけ死人や不具者を出しておきながら、まだ足りずに、おれみてえな奴まで必要としやがった。戦争なんてもんが、どうして降りかかった来たんだ？—— みんなの上いきなり！—— 怖ろしい報いだ」⁷

戦争は、撃ちあいによって人を殺すだけでなく、さまざまな形で「小さき人」の心身を破壊してしまうものである。アンガラ川を渡ろうとしたナスチョーナは、追手に迫られ、夫のもとに行くことも逃げきることもできずに入水する。飛びこむ寸前に彼女は「美しいお伽噺の中から出て来るように何かがちらつく」のを見た。安岡治子氏によると、それは水の妖怪ルサルカの宮殿であろうという。そうだとすると、ナスチョーナは死後、ロシアの民間伝承にしたがってルサルカとなり、水晶の宮殿に住んだのだろう。⁸

戦争に行き負傷したオクジャワの弱虫な「少年兵」、帰国して収容所に送られたソルジェニーツィンの「元捕虜」、前線を離れて帰郷したラスプーチンの「脱走兵」。1960年代から70年代にかけて書かれたこの「アンチヒーロー」たちのリストには、さらに「女性兵」が続くだろう。男性兵たちと同等かそれ以上に過酷な戦場をかいくぐったに

⁶ ラस्पーチン（原卓也、安岡治子訳）『生きよ、そして記憶せよ』講談社、1980年、65頁。

⁷ 同上、188頁。

⁸ 安岡治子「『生きよそして記憶せよ』のフォークロアの宗教的ポドテクスト」*Rusistika*：東京大学文学部露文研究室年報4、1987年、111頁。

もかかわらず、戦後そのことで後ろ指をさされ口をとぎして耐えなければならなかった女たちである。彼女たちの言葉は、言うまでもなく、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチの証言集『戦争は女の顔をしていない』に深く刻みこまれている。アレクシエーヴィチが証言を集めだしたのは 1970 年代だが、単行本として世に問うことができたのは、やはりペレストロイカの始まる 1985 年だった。

どの作品も、ロシアによる戦争をまさに現在進行形で経験している私たちにとって、きわめてアクチュアルだ。今回ロシアは大祖国戦争以来の大規模な動員令を出したというが、今後、ロシア文学はいったいこの戦争をどのように描いていくのか。はたしてミハイル・シーシキンが予言しているように、「犯された罪を告白し、なぜ国家と国民がこのような恥辱に行き着いたのかを認識しようとする」⁹ 本が書かれるのだろうか。

⁹ ミハイル・シーシキン「プーチンは皇帝か」『朝日新聞』2022年7月5日朝刊。